

刊行によせて

柿谷 正期

日本選択理論心理学会会長

教師は世界で一番難しい仕事をしていると言われます。なぜなら、教師は教えるだけではなく、生活指導や部活動指導、また保護者対応等々、およそ「教育」と名のつくあらゆることを担わされ、常に成果を上げることが期待されているからです。しかも望まれている「成果物」は世界に役立つ子どもです。

それだけではありません。会社組織に例えれば、職場ではマネジメントの対象である社員は給料をもらいます。しかし、学校では、社員に匹敵する子どもは給料をもらいません。子どもは社員でもあり成果物でもあるのです。そして、子どもと保護者は顧客でもあるという複雑な関係です。こんな大変な組織は学校だけでしょう。

問題が起こったときの普通の対処の仕方は、問題を起こした人を矯正することです。教師と子どもの関係でも、夫婦でも親子でも上司と部下の関係でも、普通の解決策は相手を変えようとするのです。脅して、罰を与えて、時に相手が変わることがあります。そこで、この考えに問題があるとは考えないのです。

しかし、このような従来の考え方に問題があることに気づいた人たちは、新しい理論を模索しました。精神科医ウイリアム・グラッサーはこの新しい考え方を「選択理論」として世に提唱したのです。

選択理論は世界に広がり、人間関係にかかわる領域で使われてきました。ビジネス、司法矯正、カウンセリング、教育等。学校で導入されて、クオリティ・スクールが誕生しています。そこでは上質の追求がなされ、学校は喜びに満ち、成績は向上し、問題行動は影を潜めました。

人間関係を良好にする術を持つ人こそが幸せになれるのです。

神奈川県立相模向陽館高校の教師たちは、どうにかしてこの考え方と対処の仕方を子どもたちに学んでほしいと願い実践してきました。その取り組みが、本書で紹介する「すこやか」、アクティブラーニングによる授業です。

ある卒業生は「すこやか」の取り組みを機に、「自分の高校生活を充実させる方向に舵取りができた」と言っています。

「教育とは本来暴力的なものだ」と言う人がいます。そこまで言わなくても教育界は外的コントロールに満ちています。そういう中で選択理論的対応をすることは容易ではありません。

本書は、選択理論を学んだ教師が子どもに合わせてアクティビティに落とし込み、実践の中で試行錯誤し改良を積み重ねた結果です。本書を使えば、選択理論を身につける速度は加速するでしょう。

ぜひ参考にしてさまざまな学校場面にお役立てください。

はじめに

「学校は子ども、教員、保護者にとって欲求充足の場である」

この文章を見たとき、皆さんはどんなことを思い浮かべますか？

「学校というところは、きまりや規律を守らなければいけないし、勉強もしなければいけない。学校は、子どもにとって必ずしもやりたいことをできる場ではない」と考える方も多いのではないのでしょうか。

この考えによれば、学校は子どもにとってはつらくつまらない場所ということになります。また、もしも子どもが勉強もせず、言うことも聞かず、やりたい放題を行えば、教員や保護者にとっては欲求充足が阻害されることになります。

だとするならば、「子ども、教員、保護者の欲求充足が阻害される場」が、現在の学校と言えるのかもしれませんが。

しかし、もしも学校が「子ども、教員、保護者の欲求が充足できる場」になることができたならば、いじめや体罰、不登校、また校則違反といった問題や勉強がらみの子どもは減り、学校は、活力に満ちた場として生まれ変わることができるのではないのでしょうか。

では、「欲求」とは、そもそもどういうものなのでしょうか。そしてそれを満たすには、どうしたらよいのでしょうか。

本書『選択理論でアクティブラーニング—道徳・総合・学活で使える「人間関係づくり」ワークシート&指導案』は、この点にスポットを当て、選択理論心理学のエッセンスをベースに、アクティブラーニングの手法により、そのまま授業等で使える

12の学習プログラムを取録したものです。

「総合的な学習の時間」は、「変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」などをねらいとしています。

また、「特別な教科」となる「道徳」では、「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」、いわゆる「考える道徳」が志向されています。

こうした流れを受け、本書では「授業」という枠組みを通して、「自分自身を知り、自分と他者とのかかわりを通して他者を理解し、自分と他者との関係性を築きながら、より良く生きるための力を育てるための学習方法」を提示しています。

本書では、教員による一方向的な講義形式の授業とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法であるアクティブラーニングによる授業の組み立てを意識的に採用しました。教員たちには今、これまでの教授法の抜本的な見直しが迫られているからです。

大作曲家ベートーヴェンが若く才能あふれるシューベルトに出した手紙に、次のようなくだりがあるそうです。

「何かを終わらせるのが大変なら、終わらせることに時間を費やすべきではない。何か新しいことを始めなさい。2年後には古いものは自然と消えているはずだ」

*

本書を手にした方が、イメージを豊かに膨らませて、まずは「やってみよう！」との思いを抱き、そして考え、実践していただけることを期待してやみません。

伊藤昭彦